

近代北欧文学における太陽と精神疾患の表象
ラーゲルレーヴ『ポルトガリエンの皇帝』を中心に

日本独文学会秋季研究大会（2010年10月9日（土） 千葉大学）

発表者：中丸 禎子（日本学術振興会特別研究員 PD（一橋大学）、東京理科大学・明治大学非常勤講師）

【対象テキスト】

- ・ Selma Lagerlöf (1858-1940): *Kejsarn av Portugallien*, 1914
- ・ ラーゲルレーヴ『ポルトガリヤの皇帝さん』、イシガオサム訳、岩波文庫、1981

A. 対象作品の選択理由

1. ラーゲルレーヴにおける「転換点」

1858年：ヴェルムランドに生まれる

1891年：『イエスタ・ベルリングのサガ』出版。「90年代」文学¹の代表作。

1899年：『地主屋敷の物語』

1901年：『エルサレム 第1部』。第1回ノーベル文学賞の候補となる。

1902年：『エルサレム 第2部』。英語訳、ドイツ語訳などと同時出版。

1906～07年：『ニルスのふしぎな旅』出版。80か国語以上に翻訳

1907年：ウップサラ大学名誉博士号授与（女性初）

1909年：ノーベル文学賞受賞（女性初・スウェーデン人初）

1911年：国会で演説『家庭と国家』。女性参政権の導入を主張。

1914年：スウェーデン・アカデミー会員に選出（女性初）

『ポルトガリエンの皇帝』

1910年代：「90年代」文学の終焉と「モダニズム」文学の勃興

1918年：反戦小説『追放者』→低い評価

1922/30/32年：自伝『モールバック』三部作 → 『イエスタ』と同系列

1925/28年：『レーヴェンシエルドの指輪』三部作 → の作品として人気

1933年：『土間で書いた話』→ナチズム批判

1940年：ヴェルムランドで死去

「国民作家」として活躍

「時代遅れ」の作家へ

2. 「精神疾患」のポジティブな描写とドイツ・北欧の優生学

- ・ 「90年代」文学におけるフロイトの影響
- ・ 1929年 デンマークの断種法（不妊化の許可に関する法律）
- ・ 1933年 ドイツの断種法（Gesetz zur Behebung der Not von Volk und Reich；民族および国家の危難を除去するための法律）
- ・ 1934年 スウェーデンの断種法（Lag om sterilisering av vissa sinnessjuka, sinnesslöa eller andra som lida av rubbad själsverksamhet；特定の精神病患者、精神薄弱者、その他の精神的無能力者の不妊化に関する法律）

☛ 『ポルトガリエンの皇帝』に、民族主義・ナショナリズムに貢献する「国民作家」との決別の可能性を探る

¹ 1850年代の北欧の近代化を背景に、1870年代から1880年代にかけて、自然主義的傾向を持つ「80年代（åttitalet）」文学が興った。これに対して、1880年代末から1910年頃にかけて、政治の保守化、およびニーチェやフロイトの影響の下、反自然主義的な「90年代（nittitalet）」文学が興った。

B. 『ポルトガリエンの皇帝』 (Kejsarn av Portugallien, 1914)

1. 基本情報

- ・場所：ヴェルムランド（ラーゲルレーヴの故郷）
- ・時代：1860年代
- ・登場人物：
 - ヤン・アンデション：小作農。自分のことを「ポルトガリエンのヨハネス皇帝」だと思い込む。
 - クラアラ・フィーナ・グッレボルイ：ヤンの娘。ストックホルムで売春婦になる。
 - カトリーナ：ヤンの妻。
 - 前の領主（フェッラのエリク）：ヤンに好意的。家を建てるための土地を無償提供。
 - 新しい領主（ラーシュ・グンナソン）：前の領主が無償提供した土地の代金をヤンに請求。
 - ストックホルムの商人：クラアラに「赤い服」を贈る。クラアラの売春を斡旋する。
- ・出来事
 - クラアラ0歳：8月：太陽から名前をもらう（クラアラ・フィーナ・グッレボルイ＝金の城の
明く美しい君）→【引用8】
 - クラアラ3歳：猩紅熱→【引用9】
 - クラアラ6歳：学校の試験。神＝父＝ヤン
 - クラアラ17歳：冬：領主の代替わり
夏至：赤い服を着て教会に行く
 - クラアラ18歳：出稼ぎ先のストックホルムで売春婦になる
10月1日：支払期日
 - クラアラ不在時：ヤンの発狂→【引用1】
 - 15年後（クラアラ33歳）：クラアラの帰還→【引用2】（醜くなったクラアラ）
ヤンとカトリーナの死
クラアラの改心→【引用3】（美を取り戻したクラアラ）

2. 研究史・受容史

- ・テーマは父の娘に対する愛
 - ・第4戒：汝の父母を敬え（Edström）
 - ・父なる神の人類に対する愛（Edström）
 - ・ラーゲルレーヴ自身の親子関係を反映（Wivel）
 - ・おろかな男のかしこい愛（イシガ）
 - ・「理性を超えた愛」の証拠としての狂気
- ・精神疾患の描写への精神医学的アプローチ（Ravn, Husén）

C. 作品解釈：三つの層

1. 父と娘の愛／父の娘への愛

- ・不完全な存在としてのクラアラ
- ・広い世界にあこがれるクラアラ→【引用4】、画像資料④
- ・父と娘の葛藤 ⇔ 社会問題としての売春：1860年代ストックホルム（Vinge）

☛ 父娘関係の崩壊と回復

2. 聖書的救済

- ・クラアラの墮落と人間の墮罪→【引用4】、「キリストの誘惑」（参考資料B. 1.）

- ・赤い服＝若い女性の傲慢、不遜、ふしだら、忘恩の象徴
vgl. アンデルセン『赤いくつ』（参考資料B. 2.）
- ・レーヴダーラのクララ＝エデンのイヴ→【引用5】
- ・エデンの東＝東の国々（オーストリア、ポルトガル、日本）→【引用1】
- ・クララの変容＝キリストの変容→【引用3】、「キリストの変容」（参考資料B. 1.）

☛父ヤンによる娘クララの救済＝父なる神による人類の救済

3. クララ＝太陽

「第2の層」の問題点

- ・なぜ改悛したクララが18歳の時以上に美しくないのか→【引用3】
- ・赤い服の位置づけ 墮落の原因⇔幸せな記憶の象徴→【引用3】、【引用7】、vgl. 『赤いくつ』

クララ＝太陽

- ・太陽の色としての赤／猩紅熱→【引用8】、【引用9】（Wivel）
- ・太陽（solen）＝hon
vgl. スウェーデン語の人称代名詞：彼女 hon、彼 han →人間にのみ用いられる
それ den（両性）・det（中性）→事物にのみ用いられる
- ・太陽＝女性＝クララ・フィーナ・グッレボルイ（金の城の明る麗しの君）
- ・太陽が出てくる「東」
- ・太陽の死（日暮れ・8月）
- ・クララの変化と太陽の運行：誕生＝8月（雨が降り、11月のような気候）
17歳の日曜日＝夏至
支払期限の10月1日／売春開始＝秋分
ヤンの死＝11月
ヤンとカトリーナの埋葬＝クリスマス前の日曜日（冬至）
- ・猩紅熱（3歳）←15年間→最良の時（17／18歳）←15年間→帰郷（33歳）
（冬至） （夏至） （冬至）

狂気＝予見／予言

- ・太陽神アポロンとトロイアの巫女カッサンドラ（ギリシア神話）
- ・ラーゲルレーヴにおける狂気の描写の変遷
1899年：『地主屋敷の物語』：暗闇としての狂気、その克服
1901/02年：『エルサレム』：太陽がもたらす予言＝狂気（vgl. 中丸「太陽と死」）
ただし、周りの人間には理解されず、「狂人」は日常生活に戻る
1914年：『ポルトガリエンの皇帝』：太陽がもたらす予言＝狂気
周りの人間に「予見能力」として提示、主人公は狂ったまま死去
- ・論理的思考力で理解する「事実」⇔通常の間には理解できない「真実」＝「狂人」の「予言」

☛太陽クララによるヤンの預言者化

4. まとめ

- ・ヤンがクララを導く（第一・第二の層）⇔クララがヤンを導く（第三の層）
→ヤンとクララの対等性
 - ・アダムとイヴ
 - ・皇帝 (kejsarn) と女帝 (kejsarinnan) ⇔皇帝の妻 (keisarhustrun) カトリーナ
- ・本当の人間→【引用 1 1】
- ・日常=人間世界〜〜救い〜〜非日常=キリスト教、太陽信仰

☛狂気に対するラーゲルレーヴのポジティブな評価

【発表者連絡先】

メールアドレス：nakamart@kme.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www7b.biglobe.ne.jp/~nakamaru_teiko/index.html

（「業績」欄から、これまでに発表した雑誌掲載論文（PDF ファイル）がダウンロードできます）

- ・今回の議論に関連する論文

「太陽と死—サイドのカミュ論をヒントに、ラーゲルレーヴ『エルサレム』を読む—」、「北欧史研究」第 24 号（バルト・スカンディナヴィア研究会）、pp.96-108、2007 年 8 月刊行

【参考文献】

〈ラーゲルレーヴ作品〉

- ・ 1899: En herrgårssägen
- ・ 1901: Jerusalem I. I Dalarne
- ・ 1902: Jerusalem II. I det heliga landet
- ・ 1914: Kejsarn av Portugallien.

全て、Förord av Sven Delblanc, Stockholm (Albert Bonniers Förlag) 1984 所収。年は初版出版年。

- ・『地主の家の物語』（佐々木基一訳）、小山書店、1951
- ・『エルサレム 第 1 部』（石賀修訳）、岩波書店、1942
- ・『エルサレム 第 2 部』（イシガオサム訳）、岩波書店、1952
- ・ポルトガリヤの皇帝さん（イシガオサム訳）岩波書店、1981

〈二次文献〉

- ・ Edström, Vivi: *Selma Lagerlöf. Livets vågspel*. Uddevalla (Natur och Kultur) 2002.
- ・ Wivel, Henrik: *Snedronningen*. København (G.E.C. Gads Forlag) 1988. (Wivel, Henrik: *Snödrottningen. En bok om Selma Lagerlöf och kärleken*. Översättning av Birgit Edlund. Uddevalla (Bonniers) 1990.
- ・ Wallström, Kjell: *Kärlekens skapande kraft i Kejsarn av Portugallien*. I: Lagerlöfstudier 1976. Falköping (Gummessons Tryckeri AB) 1976
- ・ アンデルセン『赤いくつ』、大畑末吉訳『アンデルセン童話集 2』、岩波文庫、1982 年、pp. 267-282
- ・ 『聖書 新共同訳』、日本聖書教会、1987 年

〈インターネットサイト〉（以下のサイトで、著作権の切れた北欧語文学の原典が閲覧できます。今回扱ったものはすべて掲載されています）

- ・ Projekt Runeberg（北欧語） <http://runeberg.org/>
- ・ Arkiv for Dansk Litteratur（デンマーク語） http://adl.dk/adl_pub/forside/cv/forside.xsql?nnoc=adl_pub

〈引用集〉

A. 『ポルトガリエンの皇帝』より（【引用】の横にあるのは章のタイトル、引用文末の s.はスウェーデン語のページ、p.は岩波文庫版のページ。下線はすべて引用者。原文に言及する引用文のみ、下にスウェーデン語原文を載せる）

【引用 1】 「皇帝の歌」

それは音楽だった、それは！古い街道に並ぶ小さな若木だけでなく、森全体が合奏していた。それはオルガンと、太鼓と、トランペットだった。それは小さなツグミのフルートとズアオドリの笛であり、小川と水の精であり、鳴り響く風鈴層と響き渡るキツツキだった。

一度たりとも、彼はこのようにすばらしいものを聞いたことがなかった。一度たりとも、彼はこのような形の音楽を聴いたことがなかった。それはしっかりと彼の耳の中に腰を下ろしたので、彼は決してそれを忘れることはなかった。

最後の歌が流れて森が静かになったとき、彼は夢から覚めたようにとびおきた。そしてすぐに、彼は森が歌った皇帝の歌を通して歌い始めた、それを忘れないように。

女帝陛下のお父上

心の限りお喜び

（中略。説明文が入る）

そう新聞に出てました

オーストリアにポルトガル

メッツ、ニッポンはそうでした

ボン、ボン、ボン、とくるくると

ボン、ボン

帽子は金の冠に

銃は金のサーベルに

そう新聞に出てました

オーストリアにポルトガル

メッツ、ニッポンはそうでした

ボン、ボン、ボン、とくるくると

ボン、ボン

（後略）（s.127-129/ p.176-178）

【引用 2】 「歓迎の挨拶」

やってきたのは、クララ・グッラだった。（中略）彼女は羽飾りと花のついた帽子をかぶり、既製品の服を着ていたが、何はともあれ、スクローリュッカの小さな娘だった。

（中略）

カトリーナは目を丸くして、まじまじと彼女を見た。彼女は分別のある人間で、15年間離れていた者が、帰ってきたときに寸分たがわぬ姿であるなどとは、まったく期待していなかったが、自分が見ているものは恐ろしかった。

彼女の前にいる人間は、実際あるべき姿よりも、というのは、彼女は30歳をいくつか過ぎただけだからだが、ずっと老けて見えた。しかしカトリーナを怖がらせたのは、こめかみの辺りの髪の毛が白くなっていることや、額がしわだらけなことではなく、クララ・グッラが、醜くなったことだった。彼女の顔色は奇妙なほどにごって黄色く、口の周りは、厚く、汚らしかった。白目はどんよりとにごって充血し、両

目の下には、皮膚が、袋のような形になって垂れ下がっていた。(s. 194-195/p.269-271)

【引用 3】 「皇帝の埋葬」

その時、スクローリュッカのクララ・フィーナ・グッレボルイ、太陽そのものに名前をもらった彼女は、両親の墓の傍らに立って、まるで変容した者のように輝いていた。

彼女は赤い服を着て教会に行ったあの日曜日とまったく同じように美しかった、それ以上に美しくはなかったとしても。(s.224/p.314)

Där stod Klara Fina Gulleborg ifrån Skrolycka, hon, som var uppkallad efter själva solen, vid sina föräldrars grav och lyste som en förklarad.

Hon var likaså vacker som den söndagen, då hon gick till kyrkan i den röda klänningen, om inte vackrare.

【引用 4】 「大スニーパ」

森がなくなってしまう以来（引用者註：一つ前の段落で、森が 20 数年前に火事で焼けたことが書かれている）、上からの眺めはすばらしかった。そこからは、細長いレーヴェン湖の全体が、湖をとりまく緑の谷の全体が、谷を守る青い山々のすべてが見渡せた。アスケダーラナの若者が狭い谷間からスニーパの頂に上ると、誘惑者がわれらが主を、世界のあらゆる国々とその栄光を示すために連れて行ったあの山を思い出すのだった。

ついに森をぬけて平地に出ると、ヤンは、すぐに歌い手を見た。最も大きく展望の開けた一番高い山頂には、境界石が置かれており、その石のてっぺんに、赤い服を着たクララ・フィーナ・グッレボルイが立っていた。

(中略)

彼女は何マイルも何マイルも続く土地を眺めやった。湖畔の険しい丘のふもとの白い教会を、大庭園や果樹園に囲まれたブルクと地主屋敷を、森のはずれに長く細かい列をなす農家を、耕地の正方形を、長く曲がりくねった道を、境界も終わりもない森を見た。

最初、彼女は歌っていたが、すぐに押し黙って、彼女の前に広がる広く、開けた世界を見晴るかすことだけに意識を集中した。

最後に彼女は、両腕を伸ばした。それはまるで、彼女がそのあらゆるもの、彼女がこの日まで遠く隔てられていた、あらゆる偉大で、力強く、豊かなものを抱きとろうとするかのようなようだった。(s. 77-78/ p.105-106)

【引用 5】 「禁断の実」

一よしよし、えらいぞお嬢ちゃん、彼（引用者註：リリエクローナ中尉＝ラーゲルレーヴの父をモデルとする人物）は言った。えらいぞ、父さんに罪をかぶせなかった。知っているか、われらが主がアダムとイヴを怒ったのは、彼らがりんごを盗んだからではなく、臆病風をふかせて罪を擦り付けあったせいだ。りんごは持っていきなさい、怖がらずに本当のことを言ったからな。

こういって彼は、息子の一人の方を向いた。

一ヤンにパンチを一杯！彼は言った。ヤンと一緒に乾杯だ、昔イヴ母さんがしたよりも、あの娘はいい答えを言ったな。クララ・グッラが、イヴの代わりに樂園にいたら、わしらみんなにとって良かっただろうに。(s.60/ p. 82)

【引用 6】 「赤い服」

—この娘がふさわしい服を着なければならぬ、ということでしたら、と彼は言った。それならこの子は太陽のように輝きます。生まれてからこの方ずっと、この子は私らの歓びであり、太陽でした。

牧師は振り返って、思慮深く三人全員を見た。ヤンもカトリーナも老いて、くたびれていたが、自分たちの間にいる輝く若い娘を見る時、しわくちやの顔の中の目は輝いていた。

この時はっきりと、牧師は、充足の中にある老人たちを妨げたことは罪だった、ということをも自分自身に対して認めた。

—あなたが貧しい両親の光であり歓びであるのなら、あなたは誇りを持って、その服を着ていいのですよ、と彼は優しい声で言った。父母に幸福を与える子供は、私たちがこの目で見ることのできる最も良いものなのだから。

【引用 7】 「皇帝の埋葬」

彼女は、赤い服を着て教会に行った日を思い出した。どんな人間も、あの日のヤンがそうであったほど、善良で、幸せに見えたことはなかった。(s. 223/ p.312)

【引用 8】 「クララ・フィーナ・グッレボルイ」

太陽は突然、より鋭くたち現れ、赤い光を子どもにも小屋にも投げかけた。

—どうも、名付け親になってくれなさるのかね、とスクローリュッカのヤンは言った。

太陽はそれには答えなかった。彼女は、もう一度大きく赤く輝いたが、雲のヴェールをかぶり、消えてしまった。

そこで再びカトリーナの声が聞こえた。

—どなたかそこにいらっしゃるの？誰かとしやべってるようだけど。もうそろそろお入りよ。

—おう、今入るわ、彼は言って、すぐに入った。いい身分の人だったよ、通って行ったのは。(中略) 聞こえた限りじゃあ、この子はクララ・フィーナ・グッレボルイと言うそうなの。(s.15/ p.19)

Solen bröt fram allt skarpare och kastade ett rött sken över både barn och stuga.

—Kanske att du te å mä vill vara gudmor åt'na? sa Jan i Skrolycka.

Solen svarade just ingenting på detta. Hon lyste fram stor och röd än en gång, men så drog hon molnslöjan över sig och försvann.

Då hördes Kattrina återigen.

—Var det nån där? Jag tyckte, att du talte ve nån. Du får allt komma in nu.

—Ja, nu kommer jag, sa han och trädde in med detsamma. Det var e så fin herrskapsmänniska, som gick förbi. Men det var så brått för'na, så jag hann knappt säga go'dag, förrn ho var borta igen.

—Kära då! Det var bra förargligt, när vi nu har väntat så länge. Du hann väl inte å fråga'na vad ho hette?

—Jo, ho hette Klara Fina Gulleborg, så mycke fick jag ur'na.

【引用 9】 「猩紅熱」

彼女は体中が赤く、火のように燃えていた。(s.30/ p.40)

【引用 10】「別れの言葉」

ーヤンがおかしかったのかどうか、俺にはわからん、と彼は割って入った。俺はヤンに、クララ・グッラの周りは、看守なぞ見えなかった、と言った。するとヤンは、「わしの親切なリンナルト・ビョルンソンは見なかったのか、あの子が通っていく時、あいつらが周りで見はっていたのを。〈高慢〉やら〈頑固〉やら、〈重荷〉やら〈欲望〉やら、そういうもの全部だった、あの子が皇帝の国で戦うべき連中だ」(中略) ヤンは言った、「ああ、わしの親切なリンナルト・ビョルンソン、神さまに祈ってくれ、わしがあの小さな娘を悪いこと全部から守ってやれるように！わしはどうなってもいい、ただあの子が救われるように」(s.213-214/p. 299)

【引用 11】「脈打つ心臓」

しかし、その瞬間に、彼は、さっき彼の心臓を動かしたものが何だったのかを理解した。彼が理解したのはそのことだけではなかった。彼の全生涯で彼に欠けていたものが何だったのかも、彼には分かり始めていた。悲しみの中にある心臓や喜びの中にある心臓を感じたことがないものは、きっと本当の人間には数えられないのだ。(s.12/p. 15)

B. 参考資料

1. 聖書

楽園追放

主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、じぶんがそこから取られた土を耕させることにされた。こうしてアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた。(「創世記」3)

誘惑を受ける

イエスは四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。(中略) さらに、悪魔はイエスを高く引き上げ、一瞬のうちに世界のすべての国々を見せた。そして悪魔は言った。「この国国の一切の権力と反映とを与えよう。それはわたしにまかされていて、これと思う人に与えることができるからだ。」

(「ルカによる福音書」4。同内容：「マタイによる福音書」4、「マルコによる福音書」1)

キリストの変容

この話(引用者註：死と復活の予告)をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。

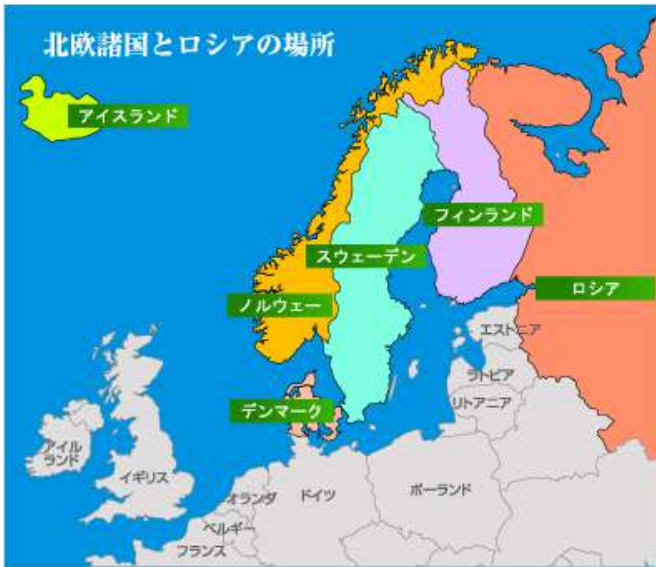
(「ルカによる福音書」9。同内容：「マタイによる福音書」17、「マルコによる福音書」9)

2. アンデルセン『赤いくつ』 最後の場面

「神様のお恵みでございます！」と、カーレンは言いました。

その時、オルガンが鳴り響き、聖歌隊の子供たちの声が、やわらかに美しく聞こえてきました。うらかなお日様の光が、教会の窓から、カーレンのすわった椅子のところまで、あたたかく流れて来ました。カーレンの心は、お日様の光と、平和とよろこびとに、みちみちて、とうとう、はりさけてしまいました。そして、カーレンの魂は、お日様の光にのって神様のもとへとんで行きました。そこでは、もうだれも、赤いくつのことをたずねるものはありませんでした。(p. 277-278)

〈画像資料〉



① 北欧諸国の地図



②スウェーデンのレーン（県）



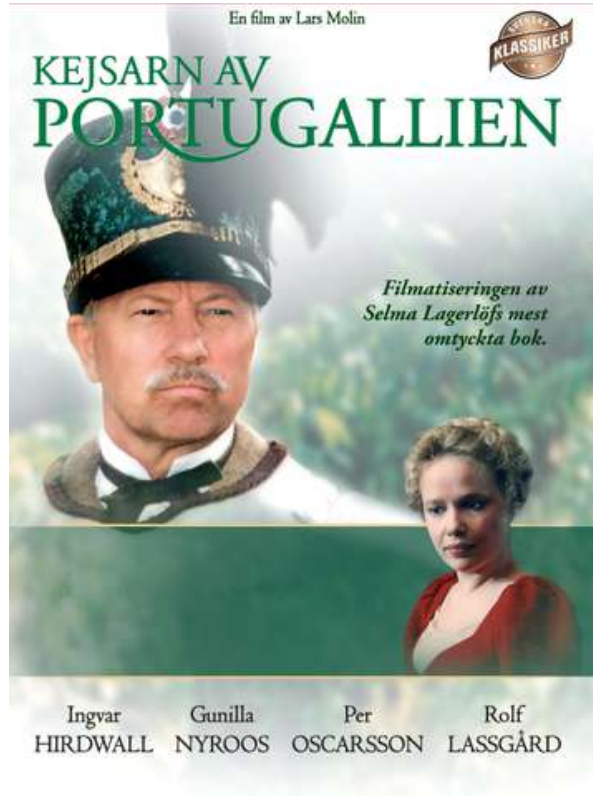
③『ポルトガリエンの皇帝』を書いたころのラーゲルレーヴ（1915年撮影）



④スウェーデン語版『ポルトガリエンの皇帝』挿絵



⑤ 野外劇でヤン・アンデションに扮する人物



⑥ テレビドラマ版 DVD (1992 年) のジャケット

【画像引用元】

① 海外旅行の専門店 エス・ティー・ワールド 北欧諸国特集

<http://stworld.jp/feature/northerneurope/>

② UPPS Sverige Semester (スウェーデン語の旅行サイト)

http://www.upps.at/main/region_detail.php?land_id=36&lang=se

③ Henrik Wivel: *Snödrottningen. En bok om Selma Lagerlöf och kärleken*. Översättning av Birgit Edlund, Uddevalla (Bonniers), 1990, s. 243.

④ Vivi Edström o.a.(red) : *Selma Lagerlöf och bildkonsten*. Uddevalla (Nationalmuseum/Selma Lagerlöf-sällskapet), 1989, s. 68.

⑤ 中丸撮影 (2008 年 8 月 17 日、於: ヴェルムランド・モールバック)

⑥ [http://cdon.se/film/kejsarn_av_portugallien_\(1992\)-728005](http://cdon.se/film/kejsarn_av_portugallien_(1992)-728005) (スウェーデンの CD・DVD 通販サイト)